

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：84602

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20066

研究課題名（和文）製塩土器からみた5世紀におけるヤマト政権の塩生産・流通体制に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Salt Production and Distribution System of the Yamato administration in the 5th Century from the Viewpoint of Salt-Making Pottery

研究代表者

岩崎 郁実（Iwasaki, Ikumi）

奈良県立橿原考古学研究所・調査部調査課・技師

研究者番号：60964715

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：高い使用価値をもつ塩は、律令制下で完成をみたように生産・流通へ有力者の差配が及ぶ。本研究は、国家形成過程に位置づけられる古墳時代を対象に、製塩集団の編成過程をはじめとした生産体制と、塩の供給範囲をはじめとする流通体制の解明を目的とする。その過程では、塩の生産と運搬に用いられる製塩土器の考古学的検討に根差した実証的な議論を目指す。分析の結果、1）生産面では、5世紀後半に紀淡海峽地域へ新技術をもつ2集団が計画的に組織されて量産に至ったこと、2）流通面では、紀伊・和泉・河内・淡路産塩の流通範囲を分析し、とくに1）紀淡海峽産塩の流通圏は広く、紀伊から播磨や山城までの畿内広域に及ぶことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1）生産物である塩が残らないという障壁を抱える古代塩業研究において、これまで重視されてきたのは荷札木簡や税収などにかんする文献史料であった。そうしたなか、本研究が対象とするのは文献史料が出現していない古墳時代であり、生産・運搬用具である製塩土器を手掛りに、考古学的検討によって塩の生産と流通にアプローチした点に学術的意義が見いだせる。

2）塩は人類共通の基幹物資であり、本研究で明らかにした塩生産組織の編成過程や塩流通の実態は、中国やヨーロッパなどの同分野ですでに研究成果があがっている地域との比較研究の素地となりうる。

研究成果の概要（英文）：The value of salt was high, and as was perfected under the Ritsuryo system, the influential people controlled the production and distribution of salt. The purpose of this study is to elucidate the production system, including the formation process of salt-making groups, and the distribution system, including the scope of salt supply, for the Kofun period, which is positioned in the state formation process. The research method is an archaeological examination of the salt making pottery used in the production and transport of salt, with the goal of empirical discussion. The results of the analysis show that 1) in terms of production, two groups with new technology were systematically organized in the Kitan-Kaikyo area in the latter half of the 5th century, leading to mass production, and 2) in terms of distribution, the distribution range of salt was analyzed, and in particular 1) the distribution area of salt from the Kitan-Kaikyo area was wide and extended to all of the Kinai region.

研究分野：日本考古学

キーワード：土器製塩 塩 製塩土器 古墳時代 日本考古学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

塩は、食用や工業用に及ぶ高い使用価値をもち、それゆえに交換物資や労働財源などの社会的に重要な価値をもつ資源である。こうした塩の生産・流通へは有力者の差配が及びうる。日本では律令制下の収取体制でその完成をみたが、その前段階の国家形成過程に位置づけられる古墳時代についてもその萌芽をみることができると想定している。

また、古代の塩業研究は生産物である塩は残らないという障壁を抱えており、これまで重視されてきたのは荷札木簡をはじめとする文字史料であった。文字の出現以前の時期を対象とする本研究では、塩の生産と運搬に用いた製塩土器を手掛かりに考古学的検討からアプローチすることで、古代塩業研究の方法論の整備にも努めたい。

### 2. 研究の目的

本研究は、国家形成過程に位置づけられる古墳時代を対象に、製塩集団の編成過程をはじめとした生産体制と、塩の供給範囲をはじめとする流通体制の解明を目的とする。

### 3. 研究の方法

塩の生産と運搬に用いられる製塩土器の考古学的検討に根差した実証的な議論を目指す。具体的には、製塩土器の製作技法や胎土の特徴を製塩遺跡ごと・小地域ごとに抽出し、これを基に生産体制分析では技術・情報の共有関係に着目し、流通体制分析では製塩土器の移動の実態を解明する。

### 4. 研究成果

2022年度は、製塩遺跡の出土資料整理、集落遺跡出土資料の調査、近畿地方における出土製塩土器集成、製塩土器の胎土分析の試験的实施を行った。

製塩遺跡(和歌山県西庄遺跡)の出土資料整理 研究の基礎となる、生産遺跡における製塩土器の出土量・型式のバリエーション・編年などのデータを収集するため、月に1度有志での「西庄研究会」を開催して資料整理を行った。本年度は出土量全体の約半数の資料整理を完了した。

集落遺跡で出土した製塩土器の調査 今年度は大阪府・兵庫県の集落遺跡4例を対象に調査を実施し、製塩土器の製作技法の検討・胎土観察および資料化を実施した。同時に、製塩土器の流通圏・流通ルートを明らかにするため、既往の調査で収集したデータを集約した。

近畿地方における出土製塩土器集成 製塩土器研究の基礎データとするため、弥生時代～奈良時代を対象に近畿地域における製塩土器出土事例の悉皆的集成作業を実施し、奈良県・和歌山県・兵庫県の集成を完了した。

製塩土器胎土分析の試験的实施 奈良県天理市布留遺跡出土の製塩土器について、1) 蛍光X線分析装置を用いた胎土分析を試験的に行った。

2023年度は、生産遺跡の資料整理・型式学的検討、消費遺跡出土資料の型式学的検討、基礎資料の集成、胎土分析を実施した。

生産遺跡資料の検討 生産遺跡における製塩土器の出土量・型式のバリエーション・編年は、

本研究の基礎をなす重要な情報である。これを収集するため、今年度は和歌山県西庄遺跡を主たる対象に資料調査・検討会を実施した。

**消費遺跡出土資料の検討** 今年度は兵庫県・和歌山県・奈良県の資料調査を実施した。例えば奈良県松山遺跡では、和歌山市西庄遺跡をはじめとした紀伊の製塩土器と型式学的特徴が非常に似通る資料が多く出土しており、吉野川を北上して奈良盆地へ至る塩の流通ルートを復元できた。また、2023年5月には奈良県の製塩土器の検討会を実施し、30名ほどの研究者が集ったなかで研究発表と意見交換をおこなった。

**製塩土器集成** 今年度は和歌山県の製塩土器出土例の悉皆的集成を実施した。その結果を古墳時代に限って述べれば、中期までは紀ノ川流域を中心に和歌山県北部に集中し、また集落遺跡で住居跡などから出土する例で占められた一方、後期は県南部を中心に、古墳の副葬品として出土する事例が多くなるという変化を見出すことができた。

**製塩土器の胎土分析** 今年度は、東京大学総合学術博物館タンデム加速器研究施設と連携し、製塩土器胎土分析の新たな方法を開拓するべく脂質分析をはじめとする分析を実施した。

研究期間全体を通じて、古墳時代中期の土器製塩生産遺跡と消費遺跡で出土する資料の実態把握がおおきく進んだ。実地での調査を重ねたことにより、膨大な量を抱える生産遺跡の資料が明確化したことで、これまで搬入元が不明であった消費地の資料の産地同定作業を進めることができた。また、理化学的手法による製塩土器胎土の分析では、蛍光 X 線分析をはじめ複数の方法を実施でき、その有用性を確かめた。

研究の成果をまとめると、1)生産面では、5世紀後半に紀淡海峡地域へ新技術をもつ2集団が計画的に組織されて量産に至ったこと、2)流通面では、紀伊・和泉・河内・淡路産塩の流通範囲を分析し、とくに1)紀淡海峡産塩の流通圏は広く、紀伊から播磨や山城までの畿内広域に及ぶことが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩崎 郁実
2. 発表標題 布留遺跡における製塩土器と塩利用
3. 学会等名 ここまで判った布留遺跡 - 物部氏以前とその後 -
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩崎 郁実
2. 発表標題 生産地と消費地からみた製塩土器
3. 学会等名 紀伊考古学研究会第26回大会 海浜集落からみた王権と地域
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 丸山 真史, 菊池 大樹, 青柳 泰介, 岩崎 郁実, 覚張 隆史, 小林 楓, 緑納民之, 中野 咲, 槇 和泉	4. 発行年 2024年
2. 出版社 東海大学 人文学部	5. 総ページ数 132
3. 書名 国家形成期の手工業生産と家畜利用	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------